コロナと戦う長尾クリニック訪問記

2021年5月17日**森実千秋**（淀川助け合い理事長/まちづくり勉強会）

尼崎市でコロナ患者を引き受けて頑張っている長尾クリニックを、5月17日「まちづくり勉強会」の仲間川内さんと訪問した。この日は朝から強い雨だったが、午後には止んで少し晴れ間も見えた午後3時頃、長尾クリニックに到着した。

正面玄関には女性職員二人が立っていたが、それは午後4時からのワクチン予約に集まる人たちの案内のためだと説明してくれた。そうしたらすぐに広報誌担当のMさんがきてくれて「今日はワクチン準備でメチャクチャ忙しい、十分な案内できないかもしれません、すみませんねー」と第一声。

テントでの診療

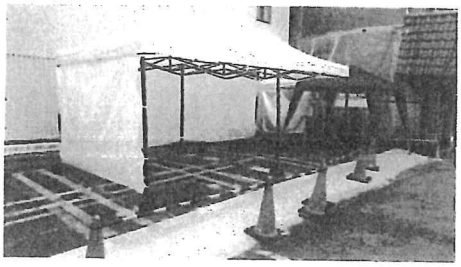
クリニックの敷地いっぱい数か所にテントが立てられている。Mさんが「熱外来にくる人はテントで待ってもらいます」と説明、同行の川内さんが「ここで診察もしはるのですか？」と聞く、Mさんが「そうですよ、冬はストーブで暖をとりました」と答える、僕が「寒いけれど風通しがよいので、コロナの感染防げたのと違いますか」と聞くと、Mさん「そうです、医療スタッフも今のところ感染者ゼロなんですよ」と言い笑った。

市民の支持が増え始めた

広報誌担当のMさんが、コロナの診療を引き受けた当初は、コロナ恐怖に煽られた市民からの反発があり、石を投げられた事があるくらいでしたが、コロナが普遍化するにしたがって「病院が病気を診るのは当たり前」の考えが広がり、コロナ診療を積極的に受け入れる長尾クリニックを支持する声が強まったと言い、少し顔を輝かせた。僕は「流れが変わりつつある、市民が何が正しいのかを見極めようとしている」と思い、それまでの長尾クリニックの奮闘を知る者として、嬉しくて胸が熱くなった、川内さんが「それは良かった」と呟いた。

コロナの指定感染症2類扱いは崩れている

では実際のコロナ診療はどうなっているか、指定感染症なのでコロナは保健所の管轄になり、そこの指示で医療機関と患者は動くことになっているが、コロナ患者が目の前にいるのに保健所の機能がパンクして、電話してもつながらない、何とかつながっても指示が来るのは2，3日経ってからの状況、これでは患者の命が危ない、放置できないのでクリニックから酸素ボンベを持って患者の家へ行き治療して何とか命をつないでいる。しかしこの治療について「保健所の指示ではなく勝手な行動した」と批判される。



さらに指定感染症の柱である、感染者と患者の完全隔離はもはや不可能で兵庫でも自宅待機者が何千といる、しかし法の建前が通りコロナの自宅待機者への診療を行政が認めたのは最近であった。

Mさんが「コロナの指定感染症2類扱いが実態に合わないのですよ」と、語気を強めたのが印象に残った。

（5月20日フェイスブック投稿／森実千秋）